

平成27年度総会と
第28回 秋の詩祭 開催

開催日：平成27年11月23日(月・祝)
 会場：前橋テルサ4階 第3研修室

群馬詩人クラブ
会報
 No. 294

編集／群馬詩人クラブ幹事会
 代表／平野秀哉
 発行／群馬詩人クラブ事務局
 〒370-3102
 高崎市箕郷町生原1730
 龍昌寺
 印刷 三協印刷
 振替番号 00140-8-728969 狩野務

主な記事

- 会計報告書・予算書 …………… 2
- 詩祭講師・北畑光男氏作品 …… 3
 「鈍牛」村上昭夫に「辛夷」「八月の
 広瀬川」「鬼石」「指紋の銀河」「牛」
 「雪ひらのうさぎ」「足形」「北の蜻蛉」
 「遠い不明」「足うらのやみ」
- 「紫翠」の歩み 齊藤加珠子 …… 10
- 詩集評 …………… 10
 愛敬浩一詩集『母の魔法』竹田朋子
- 新入会員紹介 …………… 11
 水野有人／芝 基紘
- 群馬年刊詩集第38集 販売案内 …… 12
- 群馬詩人クラブホームページ …… 12
- 受贈誌誌御礼／編集後記 …… 12

◆ **日程** ◆

受付 午後二時三〇分より

第一部 総会 (二時～二時三〇分)

議長選出
 代表幹事挨拶

- 1号議案 平成二七年度事業報告
- 2号議案 平成二七年度会計報告
 同監査報告
- 3号議案 平成二八年度事業計画案
 質疑応答
- 4号議案 平成二八年度予算案
 質疑応答

第二部 秋の詩祭 (二時四〇分～四時)
演題「朔太郎から村上昭夫まで」
 講師 北畑光男氏

〈略歴〉
 一九四六年岩手県生まれ。
 酪農学園大学卒。
 「歷程」「撃竹」同人。
 村上昭夫研究「雁の声」主宰。
 日本現代詩人会理事長、日本現代詩歌文学館理事・評議員、埼玉県立さいたま文学館運営協議会委員、日本文芸家協会会員、埼玉詩人会会員他。

第三部 懇親会 (四時～)

会場 前橋テルサ一階「オルビエターナ」
 会費 四〇〇〇円

★当日『群馬年刊詩集第三八集』を配布します。
 ★この会報は総会の資料として使用しますので、当日ご持参ください。
 ★受付にて会費納入を受け付けます。年会費は三千円です。

一九九二年詩集『救済まで』
 第3回富田碎花賞
 二〇〇四年詩集『文明ののど』
 第35回埼玉文芸賞
 二〇〇七年詩集『死はふりつもるか』
 第13回埼玉詩人賞
 二〇一一年詩集『北の蜻蛉』
 第19回丸山薫賞
 詩集八冊。
 共著に『日本の詩』100年、『荒川流域の文学』
 『埼玉文芸風土記』、『現代詩』の50年』他

群馬詩人クラブ 平成27年度会計報告書・平成28年度会計予算書

平成27年度会計報告書

(平成26年10月7日～平成27年10月6日)

平成28年度会計予算書(案)

(平成27年10月7日～平成28年10月6日)

● 収 入 663,450

(単位:円)

| | | |
|---------|---------|--------|
| 繰越金 | 329,450 | |
| 会費収入 | 331,000 | 会員112名 |
| 日本現代詩人会 | 0 | |
| 雑収入 | 3,000 | |
| 計 | 663,450 | |

● 収 入 622,129

(単位:円)

| | |
|---------|---------------|
| 249,129 | 繰越金 |
| 333,000 | 3,000円×会員111名 |
| 40,000 | |
| 0 | 0 |
| 622,129 | 収入計 |

● 支 出 414,321

(単位:円)

| | | |
|-----------------|---------|------------------|
| 会報印刷費 (名簿ほか) | 197,406 | 289号～293号 |
| 通信費 | 69,782 | |
| 秋の詩祭 | 40,000 | 講師謝礼ほか |
| 会議費 | 30,000 | 幹事活動費 3,000円×10人 |
| 年刊詩集補助 | | |
| 現代詩作品展 | 48,528 | ハガキほか |
| 総会関係費 | 14,830 | テルサ会場費他 |
| 弔電 | 3,553 | |
| 諸雑費 | 10,222 | 封筒、ラベルシートほか |
| 予備費 | | |
| 計 | 414,321 | |

● 支 出 408,800

(単位:円)

| | |
|---------|-----------------|
| 200,000 | 294号～298号 |
| 70,000 | |
| 40,000 | 講師謝礼ほか |
| 30,000 | 幹事活動費3,000円×10人 |
| | |
| 50,000 | ハガキほか |
| 5,800 | テルサ会場費 |
| 3,000 | |
| 10,000 | 封筒、ラベルシートほか |
| | |
| 408,800 | 支出計 |

収入合計 663,450円 - 支出合計 414,321円 = 差引残高 249,129円

次年度繰越金 249,129円

【講師作品】 北畑光男

鈍牛…村上昭夫に

冬枯れの並木の向こうに

牛は雨でびっしょりぬれている

神に祈りながら

牛の方に近づいていくと

牛は口を静かに動かしている

冷えてしまった神の外れで

牛は何をかみしめているのだろう

食べたものを噛み返すだけなら

あたたかい敷き藁の上にいればいいのに

牛は耳も背もびっしょりぬらして

枯れた草地にたっている

乳頭からはしづくが光って落ちてている

私は目をつむりながら

心のなかで呼び戻しようもない神の名を呼んでいる

しづくが黒い土の世界で流れる星たちの川になつていく

冷たい雨のそぼふる神の外れで

牛は静かに噛みしめている

牛の重さに傷つきながら

踏まれている草たちのことを

牛は

黒い世界から

草のなかをまっすぐ天にのぼっていく星たちの信仰をかみしめているのだ

それでなければなんて

牛の乳があんなにも白いものか

辛夷

別離のなみだとともに

凍てついた山の雪が融けるころ

辛夷は

大切な言葉を言いそびれたひとのように

音もなく

星雲の涯てに花ひらくのだ

辛夷は

うず巻く星雲の認識の外で花ひらくのだ

そこがどんなにあたたかいのか

誰も感じることでできない場所なのに

そこがどんな色彩をおびているのか

誰もみることのできない場所なのに

こらえてきた

ひとりの寒い冬のあとにたちのぼる陽炎をみていると

ほのぼのと

辛夷よ とささやいて

陽炎の空に手をさしのべたくなるのだ

八月の広瀬川

川は大きな木のなかから
流れ出していた
このあふれんばかりの水かさは
生い茂る葉からのようでもあるし
大きな木そのものから
流れ出しているようでもある
屋根瓦の耳は
八月の空にひかり
蝉の念仏に耳をかたむけている
前橋市住吉町のここでも
昭和二十年八月六日
今日と同じように
蝉は吊っていたか
爆弾のために地中で蒸焼きになった老人や子供
そして蝉になれず土のなかで殺された仲間の幼虫を
朔太郎が己の人生を釣ろうとし
新吉がふるさとの川と呼んだ
広瀬川は
大きな木のなかから流れ出してくる
そして屋根瓦の耳は
蝉の念仏に
じっと耳を傾けている

*昭和二十年八月五日夜、前橋市はB29九十二機による空爆を受け、防空壕に逃げ込んだ多くの市民はそのまま蒸焼きになってしまった。

鬼石

私はやってきた
軒の臉を
ひっきりなしにダンプカーが行き来する
鬼石街道を通り
杉の林が続く
石ころの道を登り
私はやってきた
冬桜の山へ
みおろせば
みずうみの額が静かにひろがっている
人工のみずうみ
人の脳細胞がうみだした巨大なダム
その水かさが
わずかばかりの知性とよばれるものが
つつましい生活を水底に沈めた
はるか奥の村へとつながる塩の道を沈めた
山のみずうみ
なにもものかによって実験されている脳の知性
人造湖
私はやってきた
遠い歴史を
冬桜にたずねるように

足の下のダムから流れ落ちるのは莫大な量の水である
歴史や文化を流してしまいかのような滝である
空をみれば

秋のひかりをあびて

うまれたばかりのようなどんぼが

こちらの冬桜の山にむかつて

いつせいにとんでくるのである

その翅には

湖底にいる村人の魂のようなものが

ちいさくひかっている

そういえば東京や大阪で飲んだ

喫茶店の水のとうめいなひかり

あれらは人工のみずうみの底に沈められた

たくさんたましいのひかりやにおいてあったか

そしてそれはまた減ぼされた文化や歴史とよばれるものであったか

指紋の銀河

腕を切り落とす前に

せめてあと一度だけでいい

この指で

ギターを弾かせてください

そういつて石坂靖之さんは

病院の待合室をにわかづくりの

コンサート会場にしたという

すでに骨を削られた

腕

それでもまだ指紋のある指で

何という曲を弾いたか

腕との別れの

前夜

石坂さんは

自分の指紋に

渦巻く銀河をみたのではなかったか

つとめてあかるく笑い

腕の切断を

私に告げる石坂さんは

けなげに耐えていたのだ

仕事の帰り

ふと仰ぎ見た夜空には

スピカがまたたいていた

石坂さんが

自分の希望のように話していた

星だ

私は自らの心のなかにある望遠鏡で

くらい宇宙をそっと覗いてみる

ほおつと渦巻くのは星雲

あれは

ギターを弾いた石坂さんの指紋だと思う

この宇宙には数えきれないほどの
渦巻く銀河があるという
それらは
たくさんの石坂さんの指紋だと思ふ

あのスピカから
別の宇宙のスピカまで
ピンと張られた弦があるのだと思ふ
ギター之音はそこから聞こえてくるのだと思ふ
石坂さんの指紋銀河が
大宇宙の弦を弾いているのだと思ふ

*私が入院した病院で隣のベッドにいた人。よく星や音楽の話をした。
一九六五年二月五日〜一九八五年四月八日。群馬県出身。

牛

消毒で白くなった牛舎には
不安におののく牛がいます
目は大きく見開き
水泡だらけになった口からは
長い涎になった不安が垂れ

涎に
一瞬写るのは
流れ星です
悲鳴かすかに

生きることの許されなかった
家畜と呼ばれるものたちの哀しさを
何度も

牛は
噛みしめています

殺され穴に埋められていった

牛

それに関わった人たちのやるせなさをも

かつて海の向こうでも

なかまたちが穴に埋められていった

蹄までも水泡ができてはつぶれ

肉がむきだしになっています

恐ろしくなんかないんだと牛は自分にいいかせています

そのころ

銀河系のそとがわ

はるかに遠いところから

星のひかりよりも速いながか

透明な牧草になり

横たわる牛の蹄にうちよせてきます

雪ひらのうさぎ

高原の牧草地には
 光が吹き渡っています
 牧草の海のはるか向こうには
 船がうかんでいます
 牧草は
 海の波のように
 つぎつぎと光をはこんでいます
 私はトラクターに乗り
 光を刈りたおしていきます
 音もなく光はたおれ
 影をつくっていきます
 そのなかに
 からだを刈られたうさぎがいます
 うさぎは
 かすかにけいれんしたまま
 息絶えていきます
 私の手になかに
 うさぎの濃い影がうつっています
 夜になると
 岩礁で砕け散る夜光虫のように
 ながれ星が消えていきます
 うさぎの魂です
 うさぎのことだけを思っていると
 ながれ星は雪ひらになって
 私の海のなかにふっつてきます
 ふかい海の底の方へ
 雪ひらになつたうさぎがふっつてきます

足形

胎児の浮かぶ羊水の世界は
 原始の海と同じだという
 生れたばかりの
 おまえが
 羊水の滴をしたたらせている
 産声を発した口元から
 やわらかいしわくちやのからだだから
 かたくにぎった手の甲から
 滴をしたたらせている
 それは太古に
 いのちが初めて
 海をしたたらせ
 陸に上がった時のようである
 その時おまえは
 軟らかい布で
 拭き取られ
 足うらに墨をつけ
 足形をとられたのだ
 それはこの地球に
 上陸した第一歩を印したこと
 乾いた世界に入ってきたことだ
 あれからもうじき四か月
 泣いていたおまえは
 呼びかけに応えるように
 まだ歯の生えない口を開け
 笑顔でくっくつと笑う
 もっとしつかりした足になつた時
 おまえは地球に

二歩三歩と足形をつけていくのだ

北の蜻蛉

廃線になったレールに

夏があつまり

北国はとうめいなひかり

死者の魂の

蜻蛉たちはレールに止まるや一瞬

大きな目でみわたし

安心しきったように翅を休めています

ほくの乗ったところこは

そこに向かって走っていきます

前方には

あの世から飛んできた魂が 一列に並び

尾や翅を下げています

飛びたて

飛べ

そんな願いも届かず

魂たちは

ほくの

ところどころに潰されていきます

ほくがところどころに乗ったばかりに

背を割り

生まれ出た

あの世からの

魂をも

轢いてしまったのです

みあげれば

くるみの木や白樺の木たちは

真つ青になってふるえています

ほくは

死者の魂を

夏のひかりを

轢き潰してきたのです

ひきかえすとまたおなじことになる

戻るに戻れない

廃線になったレールには

ほくの魂がはりついたまま

夏があつまり

今日も

北国はとうめいなひかりです

遠い不明

どうやって生きていくのか

立ち尽くす

一人に

渡された一本の水入りペットボトルを

一口飲んで

生き残った手から

手へ

受け継いでいるのである

少年の頃であったか

木の切り口から滲みでる水に

口をつけたことがある

あれは

木のなかを流れる川であったか

家族や家を失ってもなお

心の水脈を涸らさず

生きのび耐えているのは木の人である

その人の首のなかを

水のおりていくのが透けて見えたようであった

水を残して飲む人は木の人

心のなかに川をもつ木の人である

新しい街路樹にもなる木の人

広げた葉の下に人を休ませる木の人である

季節外れの吹雪が

木の人を

はげしく揺すっているのである

テレビを見ながら水を飲むほくには

吹雪も

水のありがたさも見えたよう

なにひとつ見えな

遠い不明である

足うらのやみ

なにかちいさいものが動いた

ライトに

照らしだされたのは

一匹のおろぎ

こおろぎは折りのかたちで

死んだこおろぎの体液を吸っている

死体を食っている

愛する人の骨を砕いて呑んだことを聞いた

飢えて痩せ細った戦友は言った

俺が死んだら俺を食って生き延びろ

人もこおろぎも

おなじ愛情を持っていたのか

キャップライトに照らしだされた

こおろぎ

前脚を合わせ頭も下げて

内臓のとびだしたものの

頭の潰れたもの

轢かれてこおろぎのかたちのないもの

あちこちで体液を吸い死体を食っている

霧雨の農道はぬれている

キャップライトをつけていたばかりに

ほくを横切るこおろぎに

ほくは

ほくの足うらのやみを思い知らされたのだ

「紫翠」の歩み

齊藤加珠子

詩人高田敏子の詩に、初めて出合った時、私が求めていた「詩」はこれだと思った。日常を平明な言葉で書いていながら、深い意味を持っている詩である。

この方に私の先生として、指導して頂きましたと思い、不躰ながら手紙を出した。すぐに返事を頂き「野火の会」の存在を知り、入会した。

全国に八百人ほどの会員がいて、詩誌『野火』を二カ月毎に発行し、高田先生をはじめ四人の先生方が指導して下さった。

以来十七年間「野火の会」で学んだが、平成元年五月二十八日、高田先生が亡くなられて、詩誌『野火』は残念ながら閉じられた。

その後、気の合う野火仲間七人で、手紙や電話を利用して、各自の作品を見せ合う勉強会を始めた。

一年後の平成二年五月八日に詩誌『紫翠』を創刊することが出来た。同人それぞれの故郷を思い、「山紫水明」をイメージして「紫翠」と名付けた。

児島愛子 (伊勢崎市)

齊藤小夜子 (五所川原市)

瀬野チヤ (天童市)

服部のぶ子 (前橋市)

福田尚美 (高崎市)

真下宏子 (安中市)

齊藤加珠子 (伊勢崎市)

以上七名での出発であった。

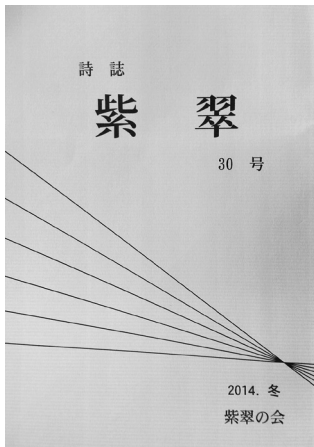
五十歳代だった私たちは、遠距離でも作品を送り合い、批評しあって勉強した。

創刊から二十五年経ち、仲間にもそれぞれの事情あって、現在は児島、福田、真下、私の四人である。以前は年二回発行していたが、ここ何年かは、年一回の発行である。各自が詩を三篇とエッセイを発表する事にしていて、編集は順番に受け持っている。

「詩を書かない人にも解かる詩」と、高田先生は教えて下さった。私たちも、その教えを受け継いで行きたいと思っている。

皆高齢になって。遅い歩みではあるが、一歩ずつ歩いていきたい。

この年末には、三十一号を発行する予定である。



詩集評

愛敬浩一詩集『母の魔法』

母のつぶやき

竹田朋子

大好きな詩集である。

『母の魔法』

白い表紙に、愛敬浩一詩集。詩的現代叢書。双方の黒字に護られるような赤いタイトル名に、私は既に魔法にかけられたように心弾む。淡いピンクの一枚を繰り、目次へと進む。二十五篇から成り、田口三船氏の跋文、そして、あとがき。もちろん、あとがきから拝読する。私のクセなのだ。

上毛新聞に掲載されたものが大半で、それゆえ「必ずしも分かりやすくはない私の現代詩も、これで少しは風通しがよくなっただろうか。」と記されている。

愛敬さんは吾妻郡生まれ。私も同郷である。それだけに言葉や内容が懐かしく、「あらっ?」「そうそう!」と共感、共鳴の連続である。

たとえば「裏榛名」に登場する市川先生とは、著名な歌人である春男先生では? 「妙義」これはもうそのまま私の小学生時代の運動会の光景でもある。愛敬さんは「わくわくしたものだ」そうだが、私は大の運動オンチ泣きたいほどイヤなリレーだった。

〈赤組は赤城で／白組は白根／ここまでは分かるが／榛名が青組／妙義が緑組ということになっていて／なぜそう決まっているのか不

思議だった／それはさておき／やっぱり盛り上がるのは／リレーで／「アカ勝て」とか「がんばれミドリ」とか／声が掛かった／そう言えば「ミドリ」の妙義も／もう紅葉している。この結びに（あっ、さすがに！）と心惹かれた。展開の妙、とでもいうのだろうか。角度を変えての結び方である。それは随所に見られる。

「赤城山」へどこか五月のような走り方だ／私の誕生日、五月よ。「花を見に行く」へ奇跡のような一瞬に出会うために／私はやって来た。「白根」へたとえばその色のコップで汲み取っても／その色を持ち帰ることはできない。「十一月」へ早咲きなら椿も見られようという時期で／そこに「春」が隠れていたります。

愛敬さんは意識してこのような結び方をされるのだろうか？ いえ、自然に湧き出してくるのだ。だから、詩人なのだ。

それは、圧巻の「母の魔法」も同様で、へたぶん私はその時／何か、とても大切なことを学んだのだと思う。

何て真つすぐなのだろう。そして温かいのだろう。詩もまた「人なり」なのだ。

この詩の中での、母がシャツを畳み、ぼんと叩く行為に似たことを、私もまた幼いころ母から受けた。

その、詩はあまり得意ではない、八十六歳になる本好きの母が「心に響く詩集ねえ」とつぶやいた。

（群馬県文学賞「評論・随筆部門」選考委員）

新入会員紹介

チンパンジーと酒

水野 有人

上毛新聞にチンパンジーと酒についての興味深い記事が載っていた

チンパンジーに酒を飲ませると人間と同様に常習化する
チンパンジーも酒の味を脳に記憶させるのだろうか

酒を飲んでいる時は何を考えているのだろうか

人間ならば会社のこと、上司の愚痴、仕事仲間、恋愛について妻の愚痴など

動物園につれてこられた時のこと、遠い故郷のアフリカのジャングルの仲間のチンパンジーのこと、

リーダー同士のけんか、雌のチンパンジーを

巡つての争い

わたしは人間だからチンパンジーの気持はわからない

チンパンジーにも子育ての悩みはあるかもしれない

チンパンジーも人間に近い動物だから酒を飲みたくなる時もあるのだろう

私は中之条町の陶芸館という体験施設で一般の観光客に陶芸を教えています。仕事の休憩時間を利用して詩を書いています。

毎月第四木曜日は前橋文学館友の会の「雲雀の会」というサークルで詩の勉強をしています。詩のサークルに入って、あつという間に十年が経過してしまいました。今回、群馬詩人クラブに入会したのはもつと詩の勉強をしたいと考えてのことです。それと「雲雀の会」で学習した事をより一層深めたいと思っています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

新入会員紹介

■ 芝 基 紘

住所：〒三七〇-三五三三

高崎市保渡田町二〇〇九

電話：〇九〇(三二四七)七五〇二

二〇一五年

『群馬年刊詩集第二十八集』

販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十八集』を次の要領で販売します。

内容

詩作品 六十五篇

追悼 宮崎 清

「宮崎清氏追悼」梁瀬和男

久保田 穰

「追悼・久保田穰」大塚史朗

表紙装画 山上久子

発行

〒370-3102 群馬県高崎市箕郷町

生原一七三〇龍昌寺

平野秀哉方

群馬詩人クラブ幹事会

印刷 三協印刷

頒布

二〇〇〇円 会員は一〇〇〇円

いずれも郵送費は別料金となります。

※問い合わせおよび購入希望は幹事会へご連絡ください。

(☎)〇二七-三七一一三四七二

群馬詩人クラブホームページ

サイト名

http://gunmashijinclub.jimdo.com/

掲載内容は

・群馬詩人クラブについて

現状

沿革

など

・会報

最新の会報の内容の掲載

過去(二年ほど前まで)の会報を

PDFで掲載。(ダウンロード可)

・イベント

現代詩作品展

秋の詩祭

会員の参加するイベントの紹介 など

・年刊詩集

最新の年刊詩集の目次紹介

過去(五年ほど前まで)の年刊詩集の目次をPDFで掲載。(ダウンロード可)

・会員のページ

作品

近況 等

・イベントの案内 ・近況 等

掲載ご希望の場合は、右記サイトのお問い合わせのページよりご連絡ください。

受贈誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

香川県詩人協会会報 52

埼玉詩人協会会報 78

長野県詩人協会会報 130

関西詩人協会会報 79

中日詩人協会会報 184

詩界通信 日本詩人クラブ広報72

北海道詩集62 2015年版 北海道詩人協会

杏(あんず)創刊号

詩集 もう一人のわたし 小野啓子

詩集 森の波音 池上泰子

詩集 わたしと世界 佐相憲一

詩と童話「タラの木」千葉県タラの木文学会

そして、それから11・12 大西美千代

徳島県現代詩協会 年間詩集 2015

知井(ちい) 19 名古きよえ

療7 志村喜代子

てのひら三幕公演 こまつかん

(十月二十日現在 敬称略)

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

十一月二十三日総会が開かれます。秋の詩祭の講師には北畑光男さんをお招きします。皆様どうぞご出席下さい。

まもなく任期の二年が終わろうとしています。不安の中で始まった会報担当でしたが、原稿依頼を皆様が快く引き受けて下さり、またどうしても都合がつかない方は他の方を紹介して下さいましたおかげで、無事に十回の会報を発行することができました。ねざらいや感謝のお言葉をたくさん頂戴し、時には私たちの知らない、気付かない、至らぬ点をご教示頂き本当にありがとうございます。現幹事十名、心より感謝しこの場をお借りして御礼申し上げます。

それでは、またお目にかかって詩の話を楽しみましょう、お茶でも頂きながら。(泉麻里)